

ハーバードの非常識・同志社の常識

本井 康博	同志社大学神学部教授
講師紹介【もとい・やすひろ】	【研究テーマ】 同志社の創立者、新島襄の思想（信仰）と人物、および同志社建学精神

ハーバードの非常識

先月、ハーバード大学を見学してきました。同志社教職員ツアーのガイドとして、です。いつものことですが、キャンパス中央のハーバード・スクエアの一角に、カメラ片手の観光客が群がっていました。ジョン・ハーバードの銅像の前です。

ここは、写真を撮られる銅像ランキングで全米第三位、という人気スポットです。像の左足つま先を撫（な）でれば賢くなるとか、ハーバードに入れるとか、そのような伝説が、まことしやかに流布しているのも、人気を呼んでいる一因です。だから、たいていの人が、カメラに向かって、銅像の靴の先端に手を置くポーズを決めます。そのため銅像のそこだけが、ピカピカになっています。

こうした事態を深刻に捉える人もいます。材料工学のある専門家は、靴は一千万回の摩擦には耐えられる、としながらも、摩滅の危険性を懸念しています。毎年、十万の観光客が押し寄せ、五人に一人が靴を撫でる（控えめに見積もっても、ひとり三回！）とすると、百六十六年で靴は消滅する、という予測です。

そう言えば、この風習はイエール大学にも伝染したのか、キャンパスにある第六代学長のT・W・ウールゼイ（同志社にきたD・W・ラーネットの叔父です）の靴も、右足だけがゴールデンです。

びんずるさま

靴先を撫でる効果は、さあ、どうなのでしょう。日本で言えば、さしずめ、寺院などでよく見かける「びんずるさま」（漢字では、賓頭盧さま）というところでしょうか。「なでほとけ」とも呼ばれているように、参拝者がこの仏像を撫でると、身体の不具合な箇所が治る、と言われていますね。そう言えば、新島も「ビンツル等二願カケ」する病人のことを話題にしております。

大阪では「ビリケンさん」です。普段は通天閣に鎮座されているのですが、現在、二十五日まで京都タワーにお出まし中です。足の裏を撫でると幸せになれる、という霊験あらたかな神さまですから、不幸な方にはお勧めですよ。

ですが、日米を比較しても、ハーバードは日本の「びんずるさま」や「ビリケンさん」が逆立ちしても勝てないサプライズを隠し持っています。

ウソ付き銅像

それは、この像のあだ名です。なんと「三つのウソあり銅像」という異名で有名だ、と言うのです。どういうことかと言いますと、台座に刻まれた「ジョン・ハーバード、創立者、一六三八年」という文言が、三つが三つともそろいも揃（そろ）って真っ赤なウソだ、というではありませんか。まさかそんなバカな、と誰もが思います。でもどうやらホント、らしいのです。

まず、この像はジョン・ハーバードではありません。D・C・フレンチという人が一八八四年にこれを創ったときには、ジョンの写真はもちろん、肖像画もありません。仕方なくフレンチは、現役の学生をモデルにしました。それも候補者、というか希望者が多かったので駆付けをさせて、一番になった学生を選んだ、というかなり怪しい言い伝えさえあるくらいです。どうでもいいですが、かなりイケメンですよ。

次に、ジョンは創立者（Founder）ではありません。実はこの大学は個人が創ったのではなく、団体（マサチューセッツ湾岸植民地の役員会）が設立しましたから。では、ジョンは何者かと言いますと、彼は牧師で、開校後、多額の遺産（蔵書と寄付金）を大学に寄付した奇特な人です。この功績が認められて、大学名に彼の名前が付けられた、というのがコトの真相です。

最後に、本当の開校は一六三六年です。それがなぜ、一六三八年か。不明です。確かなことは、一六三八年というのは、ジョンが遺産を寄付した年、すなわち永眠した年を指すという点です。つまり、二年、サバを読んでいます。普通、年齢は実際よりも若く、創業年は一年でも古く、というのが、サバを読むときのルール（鉄則？）というか、常識なのです。が、ハーバードは、逆を行っています。ここでも、非常識ですね。

目くじらを立てない

それにしても、どうしてこういうウソが、天下のハーバードで堂々とまかり通っているのでしょうか。もし私がハーバードのアーキビストなら、さしずめ総長辺りに捻じ込んで、即刻、修理工改築を迫るでしょうね。ところが、そこはアメリカ人。おおらかというか、度量が大きいですね。黙認しているのか、イチイチ目くじらをたてません。

こうなれば、確信犯ですよ。むしろ、ウソをジョーク扱いして、楽しんでいる感すらします。その点、私など人間がまだまだドッチャイ、ドッチャイ、とつくづく思わざるを得ません。

ちなみに、新島はかなり正確に史実を捉えています。彼の時代には、もちろんジョンの銅像なんてありません。新島は同志社大学の設立趣意書のなかで、こう書いています。

「ハーウオールド大学」は、「一八三六年、マサチューセッツ湾会社ノ裁判所〔ここは誤訳〕ヨリ寄付（・・・）スル所ノ一千弗（・・・）、並二千六百三十八年、ジョンハーウオールド氏ノ寄付スル所ノ八百ポンド（・・・）、乃（すなわ）チ四千弗ヲ以テ、創立スル所ノモノトス」。

同志社の常識

では、私たちの学園は一大丈夫でしょうね。

ところが、実情はハーバードの非常識を笑ってばかりはおれないのです。たとえば、世間の常識ではあくまでも「同志社大学の創立者は新島襄」です。新聞や雑誌の記事では、新島の「枕言葉」は、たいてい「同志社大学創立者」となっています。

でも、これはウソですよ。大学を創ろうとして失敗した男（・・・）、これが「正解」です。新島が創ったのは、同志社英学校。あるいは、せいぜい同志社普通学校止まりです。同志社が大学になるのは、新島の死から二十二年後の一九一二年（専門学校令による大学設立）。あるいは三十年後の一九二〇年。大学令による大学設立のときです。

早い話が、去年できた小学校です。「同志社小学校の創立者は新島襄」と言われても、誰だってウソは即時に見破れます。じゃ、なぜ、同志社大学になると、同じようなウソがまかり通ってしまうのでしょうか。小学校も大学も新島死後の産物です。新島が設立を見ていない、という点ではまったく一緒です。

ここから、二つ目の世間の常識が派生してきます。「新島襄は教育者である」。

こちらは、完全なミスとは言えません。しかし、反対に完全な正解というわけでもありません。というのは、新島という人は半身が教育者、残り半身が伝道者だからです。日本史の教科書や事典類では、とかく前者が前面（・・・）（オモテ面）に、時には全面（・・・）に出てしまします。

「自由教育、自治教会、両者併行、国家万歳」が、彼のモットーです。教育と伝道は、車の両輪（・・・）です。フィフティ・フィフティとされています。けれども、世間の常識では、「両者」は決して「併行」してはいません。教育が完全に先行しています。教育一〇〇パーセントとは申しませんが、教育一本では、新島は片肺飛行を余儀なくされたようなものです。これでは、可哀想ですよ。

ボストンから見える風景

要するに、ハーバードほどではなくとも、同志社や新島の場合も、世の常識と真相の間には、相当なギャップがあるのです。なぜか。理由は簡単です。今まで、新島を今出川から主として捉えてきたからです。視点を变えて、海の向こうのアメリカから同志社や新島を眺めると、景色がかなり違って見えます。

新島その人は、ボストンから見た場合、「新島襄」ではなくて、「ジョゼフ・ハーディー・ニシマ」ですから。前者は、どこまでも教育者のイメージが前面に出ています。後者は、明らかに伝道者としての要素が濃厚です。

この違いは、どこから来るのか。それを問い、そしてその違いを認めること、これが大切です。これまでの新島の伝記は、残念ながらこういう視角を欠いておりました。私が将来、新島の伝記を書くとなると、何とか「ジョゼフ・ハーディー・ニシマ」伝になるように書いてみたいと考えております。

ところで昨年、『中外日報』という仏教系の新聞から、新島襄の評伝を頼まりました（拙著『錨をあげて』一頁以下）。私はこの時とばかり、「新島は宗教者」という、いわば新島の「ウラ面」を強調しました。この新聞の読者である大勢のお坊さんに、「新島は皆さまの仲間で、宗教者、牧師です。いわばキリスト教のお坊さんですよ」と強くアピールしたかったのです。

ミドル・ネーム

ともあれ、新島の全体像を捉えるには、オモテ面だけでなく、ウラ面、すなわち宗教者としての顔に光を当てる必要があります。その場合は、新島を英語名（ジョゼフ・ハーディー・ニシマ）で見る必要があります。とりわけ、ミドル・ネームに注目してください。そう、彼はハーディー家の一員なのです。

実に不思議な縁ですが、新島は彼の家庭に養子同然の扱いで、引き取られます。ハーディーは、ボストンに住む資産家です。貿易船を十数隻、保有しておりました。そのうちの一隻

（ワイルド・ローヴァー号）が、上海でたまたま新島を「積み込んだ」というわけです。こうして、ハーディーは以後、「予ノ米国ノ父」（新島）となります。話は一挙に飛びますが、十年におよぶ海外生活を終えて、いよいよ新島が帰国するときのことです。留学中はジョゼフ・ニシマと名乗っていましたが、ハーディーからミドル・ネームを貰（もら）って、ジョゼフ・ハーディー・ニシマと改称します。普通、アメリカにはミドル・ネームを遣（や）り取りする、といった習慣はないと言われていました。けれども、新島自身が名前を「与えられた」（received）と書いていますから、この改称はやはり父親の発意、と思われます。もし、新島の方からオネダリしてつけてもらった、とすると、新島に相当の作為があったことにもなりかねません。ハーディーのネームバリューを最大限に利用してやろう、というイラシイ魂胆が、見え隠れしてきます。新島という人は、そういうシタカな計算や打算是不得意ですから、やはり父親の厚意から、と考えるほうが自然です。とすると、これはある意味アメリカでは異例の出来事のようにです。

「わが子」を帰国させる

逆から見ればそれほど、新島はハーディーにとって特別の子だった、ということになります。父親だけではなく、夫人も含めて、彼らは、四人の実子のうちから牧師が生まれることをかねがね期待していました。結局、その希望をかなえてくれたのは、新島だけです。それだけに、場合によっては、実子以上に「親思いの子」であったかもしれません。ちなみにハーディーは、新島の父親（民治）に対して、こう証言しています。自分たち夫妻は、新島を「わが子と呼ぶのを楽しみとしている」と（石塚正治『新島先生言行録』一五七頁、福音社、一八九一年）。これは帰国する新島に託した民治宛の書簡にある言葉で、書かれたのは一八七四年十月二十四日です。一方、新島がミドル・ネームを初めて使ったのは、同月十三日です。七日付の手紙の署名では、ミドル・ネームはまだ入っておりません。したがって、例のラットランドの集会（九日に終了。詳しくは拙著『ひとりは大切』参照）が終わって、いよいよ帰国するという段になって、改称の話が出たであろう、と推測できます。つまり、ハーディーとしては、新島をどうしても「わが子」として日本に送り返したかった。これがハーディーの方から改称を勧めた本意だったのでしょう。

「アメリカの父」の効果は絶大

さて、この「アメリカの父」は、新島にとって、極めて重大な局面、具体的には三つの局面で大きな効果を発揮します。まず、一つ目。ハーディーは篤信の信徒、しかも会衆派（Congregationalism）でしたから、新島もボストン上陸後は当然会衆派の教会に通い、そこで洗礼を受け、会衆派の信徒になります。次に二つ目ですが、ハーディーは有力な三つの学校（ひとつは母校）の理事をしていました。新島は、それら三校に次々と送られます。いずれも会衆派の名門校です。ハーディーの力がなければ、新島なんか到底入ることはできなかったほどの一流校です。こうして新島は大学院（神学校です）にまで進むことができ、牧師になる資格を得ました。最後の三つ目は、ハーディーはアメリカ最古のミッション（会衆派系のアメリカン・ボード）のいわば理事長でした。新島は帰国する際、このミッションから宣教師に指名されますが、ハーディーの存在を考えますと、全く自然な流れです。こうして、新島はボストンのミッション本部（というより、ハーディー）から報酬（給与）をもらって、日本伝道のために送り返されます。つまり、新島はハーディー家の一員として、まずは会衆派の信徒に、ついで会衆派の牧師に、そして最後は会衆派の宣教師になったというわけです。ボストンは、時には「会衆派の巢窟」とさえ言われるほど、会衆派の勢力が絶大です。ハーディーは、この会衆派ワールドの支柱のひとりでした。

ハーディーの子どもたち

ところで、新島を引き取ったハーディー家には、子どもが四人いました。すべて男児です。生まれた年を言えば、上から一八四〇年、一八四三年、一八四七年、一八五三年です（北垣宗治『新島襄とアーモスト大学』四三五頁、山口書店、一九九三年）。新島は一八四三年生まれですから、次男と同じ歳、ということになります。それにしても、歳の近い異邦人が突然、家庭に「闖入（ちんにゅう）」してきたことになりますから、息子たちも面食うたはずですよ。けれども、新島が家庭でイジメや嫌がらせに遭った形跡はありません。新島の人徳でしょうが、よくできた子どもたちであったことも幸いしたはずですよ。

新島の義弟・シアーズ

忘れてならないのは、ハーディーは四人の実子以外に、他にも一人の男児を預かっていたことです。経済界の恩人の遺児を百五十万ドルの遺産付きで家庭に引き取っていました。遺児の名前は、J・M・シアーズといいます。一八五四年生まれ、つまり新島より十一歳も若い少年です。ハーディーは、彼を一才余りの幼児のときから「己ノ子ノ如ク」育てていました（②四一二）。ハーディー夫妻が、新島にとって「アメリカの両親」ならば、彼ら四人、あるいはシアーズを入れて五人の男児は、新島の「兄弟」ということになります。つまり新島はハーディー家でも、六人目の子ども（年齢的には次男）、しかもいわば二人目の養子として引き取られたことになります。ちなみに、シアーズのその後の消息ですが、新島によれば、ハーディーは預かった遺産を養育費には使わず、かえって運用して数倍に増やし、成人したシアーズに渡した、といえます。シアーズは財界で成功し、ボストンでは一時期、毎年、多額納税者のトップを占め続けたといわれています。

三つのプレゼント

このシアーズは、少年ながら兄貴思いでした。義兄とも言うべき新島に、少年のころから折に触れてはプレゼントをしております。そのうち重要なものだけを三つ挙げてみますとーまず、英文聖書。新島の使った聖書で、現在新島遺品庫に残っているのは、この聖書だけです。シアーズから贈られた、と内扉に書かれています。「一八六六年四月、アンドーヴァー」とも付記されていますが、あるいはそれ以前にボストンで貰ったのかもしれません。とにかく、高校に入って半年くらいのことです。後にも述べますように、ちょうど新島のキリスト教求道が、軌道に乗り始めた時期にあたります。聖書の内扉にはさらに、「此（この）道や冥途（めいど）の旅乃（の）導灯可南（あかりかな）」という書き入れも見られます。「冥途」という言葉が、ちょっと気になりますね。江戸で培った仏教思想がまだ抜けていない証拠でしょう。それはともかく、死ぬまで座右に置く、という一種の決意表明でしょうか。実際、色鉛筆で種々の書き入れがありますので、最期まで使ったと思われる。死ぬまで大事に使われたことを見抜いたのは、徳富蘇峰です。新島の死後、恩師の遺品としてこれをゲットしております。さすが慧眼、というか、目利（めき）きですね（今は同志社に戻っています）。

新島旧邸

次のプレゼントは家屋です。帰国後には、新島はシアーズから自宅の建築資金を贈られています。新島は新婚生活を岩橋さんから借りた町屋（鴨沂（おうき）高校の東南角です）で営んでいました。何かと不自由だったことでしょう。そこへ、義弟からの資金提供です。新島はこれを元に、初めて自宅を新築いたします。これが現在も寺町通丸太町上（あが）ルに残る「新島旧邸」（一般公開もしています）です。ここで見逃してはならないことは、あれは新島の私宅にとどまらず、同時に公的な「会堂」兼「牧師館」でもある、という点です。私たちの同志社教会が、当初は「京都第二公会」という名で発足したことは、今日、こうして同志社教会で礼拝と一緒に守っている皆さまには、それこそ常識ですよ。さらに、その第二公会が、新島の借家（の一間（ひとま））で始まり、「新島旧邸」（の応接間）に引き継がれたことも、よくご存じでしょう。つまり、当初はいわゆる「家の教会」です。「新島旧邸」は、だから新島牧師が居住する牧師館である、と同時に会堂でもあるのです。

最後に会堂

しかし、会衆や生徒が増えるにつれ、次第に狭くなっていきます。それに、プライバシーの問題もあります。それを懸念したシアーズは、自宅とは別に、独立した会堂を建てるように、と新たに資金を送ってくれました。そこで、新島は自宅に隣接する南の土地を購入して、会堂を建てます。これが、京都で初めてのプロテスタント教会堂です。場所は、今の洛陽教会の辺りです。以後、ここが「街の教会」として八年間にわたって、京都における有力な伝道拠点になります。ちなみに、この時期は、私たちの教会が、独立した会堂をもった唯一の期間です。なぜなら、一八八六年にレンガ造りの立派な同志社チャペルが学内に竣工しますと、教会はキャンパス（今の今出川キャンパスです）の中に移転して「学園教会」となり、同志社教会と改称されます。以後、自前というか専用の会堂を擁しない教会としての歩みが、今日まで百二十年以上、続いています。以上のことから分かることは、新島が牧師、宣教師として世に立つにあたって、シアーズの援助は不可欠だった、ということです。つまり、聖書・牧師館・会堂という、言うなれば、「三種の神器（じんぎ）」ならぬ、一番大事な「商売道具・施設」をすべて揃えてくれたのが、義弟に当たるシアーズだったのですから。ちなみに、この前、同志社のある学生はこれを知って、こんな反応を示しましたよ。「十一歳も年下の弟に資金援助してもらうお兄ちゃんって、なんかチョット間抜け」。弟の方が桁違いにリッチ、という背景を無視して言いますと、そうですね、相手は誰であれ、新島は何かにつけ貰（もら）い上手です。ただし、貰ったものは、基本的に私物化していませんね。

同志社の創業者たち

さて、以上のことを総合的に見てみます。ボストンから見ると、同志社の景色がまるで違って見えてきます。結論的に言ってしまうと、「同志社はハーディー家の人たちが立ち上げた」という側面がはっきりと見えてきます。もちろん、この場合の同志社は、学校と教会の「両輪」を指します。これまでは、日本、いや学内でも、新島が同志社を創立した、といわれてきました。このことに間違いはありません。でも、その場合、新島が新島襄であると同時に、ジョゼフ・ハーディー・ニシマであるという事実に見線が注がれていないのが普通です。学園の面で言えば、同志社は実は、ハーディーの息子であるジョゼフという宣教師が建てた学園、という要素が高いのです。だって、資金や人材はすべてボストン（ミッション）持ち

なんですよ。おまけに、新島の「アメリカの父」は、アメリカン・ボードのいわば理事長です。私にわたってジョゼフの生活費や活動費を負担します。新島を助けて同志社を開校したＪ・Ｄ・デイヴィスにしても、ミッションの同僚（宣教師）です。

れっきとしたミッション・スクール

したがって、ボストンのミッション本部は、こう見ていたはずですよ。自分たちが日本に派遣した宣教師たちが、ミッションの資金を使って始めた同志社は、「自分たちの学校」、すなわちミッション・スクールだ、と。
ここから、同志社はハーディー家の人たちが中核になり、宣教師たちの協力を受けて立ち上げた学園、と言えそうです。
この点は、ラーネッドが証言するとおりです。初期同志社では、新島でさえも、ハーディーやデイヴィスたちの援助と協力がなければ、「何事もなすことができなかった」。特に京都では、デイヴィスが果たした役割は、新島に「比して劣らなかった」。というのは、新島は日本人側のエッセンスであるのに対して、デイヴィスは外国人教師やミッションの側のエッセンスであったから、と言っております。校長はデイヴィス、と見られるほどに、ミッション主導であったことは、前に見ました。それ以外に、新島も宣教師であることを再認識してください。ということは、ややオーバーに言いますと、ボストン（ミッション本部）から見た場合、校長は新島ではなく、デイヴィスであるように映ったはずですよ。

まるで校長はデイヴィス

こういった視点は、京都にいる私たち同志社関係者は、とかく見落しがちです。同志社を立ち上げるのに絶大な力を振るったミッションは、アメリカン・ボード日本ミッションですが、ハーディーはまさに「日本ミッションの父」でもあるのです。新島がそう断言しておりますから。
この視点を見失わないためには、ハーディーの知名度を上げる以外にありません。というわけで、先年、寒梅館ができたときに名称が公募されましたが、私は地階の大ホールを「ハーディー・ホール」と名付けたら、という提案、というか応募をしました。
そうしたら、うれしいことに私案が通りました。私にとっては、大ヒットでした。私が同志社に残す歴史的「遺産」がもしあるとすれば、この命名かな、と思ったりするくらいです。

ミッション・スクールでない、との自負

それはともかく、同志社はハーディー家の関係者をを中心に立ち上がったのです。今出川ではこれまで別の結論が出されていました。つまり、新島という日本人が創り、日本人が終始、校長（当時は社長）となった点で、同志社は神戸女学院や関西学院のようなミッション・スクールではないという見解、というより、自負、誇りです。でも、ちょっと待ってくださいよ。校長はデイヴィス、と見られるほどに、ミッション主導であったことは、前に見ました。それ以外に、新島も宣教師であることを再認識してください。新島の顔は、正面から見れば、確かに日本人の顔なのですが、「裏返す」とジョゼフの顔が出てきます。アメリカ人っぽい顔をしたジョゼフです。

シアーズから援助

ついで、教会もそうです。そもそも、新島が創設した学園教会、すなわち私たちの同志社教会は、初期の十年は、京都第二公会と呼ばれました。そのうち、最初の二年は「家の教会」、そして次の八年は「街の教会」でした。この十年の助走期間中、最大のサポーターであったのが、シアーズです。
つまり、ハーディーからさまざまな支援を受けて育てられた二人の養子、ジョゼフとシアーズという義兄弟が、共に力を合わせて開いたのが同志社教会の始まりとなった、と言えなくもありません。その意味では、新島と並んで、シアーズもまた、立派に同志社教会の創立者、少なくともその一人と言えないでしょうか。

新島の本業は伝道

こうして、ハーディー家の人たちは、学園と教会の両面で、同志社の創立に深く関わったことがお分かりいただけたと思います。いや、彼ら抜きには、同志社の両輪、すなわち学園と教会は存在し得なかったと言うべきでしょう。そして、この点を見逃すと、新島の全貌というか、全体像が見失われます。
新島はハーディーの息子として、さらには宣教師として日本に帰されたのですから、宣教（キリスト教の伝道）が彼のミッション、つまり使命です。そもそも宣教するのが、宣教師（ミッションナリー）の本来のミッション「本業」です。もし、新島の時代に国勢調査があったら、彼は職業欄に「教師」ではなく、「宗教者」と記入したかもしれません。

ニューヨーク・タイムズ

ちなみに、新島が帰国するとき、『ニューヨーク・タイムズ』（一八七四年十月二十六日）が記事にしています。あくまでも宣教師としてしか見ていないことが分かります。
「今週早く、彼は日本に向けて出発した。日本では日本人のキリスト教会を設立することになっている」とあります。学校のことは皆目、出ておりません。そもそもこの記事は、決して正確な内容である、とは言えません。まあ、世間の常識はこんなものでしょう。宣教師に期待されたものは、まずはこんなところですよ。
だから、新島は帰国後は現実には日本人の教会を創り、自ら牧師となるばかりか、日本全体、つまり国民的な伝道のためにも精力を傾注いたします。同志社という学校を創って終わり、というのでは、宣教師としては「月給泥棒」になりかねません。宣教（伝道）するというミッション（使命）を軽視、もしくは無視することになるからです。
すなわち宣教師の世界というのは、「伝道してナンボのもの」ですから。伝道せずに、あるいはそれをサボったり、手を抜いたりして、教育だけに全力投球、というのでは、よろしくありません。それは反則だよ、と言われかねません。

車の両輪

かなり乱暴に言ってしまいますと、ボストンから見れば、新島の「本職」は、教育ではなく、やはり伝道でしょう。教育に着手したとしても、それは宗教者である新島が、その信仰に基づいて学校を興した、と見るべきなのです。決して、反対ではありません。教育者が宗教に手を出したものではありません。「まず、伝道ありき」です。
新島も、こう断言します。「教育ノ如キハ、基督（キリスト）教ト分離スヘカラサルモノニシテ、文明ノ車ノ両輪ナリ」。
とするならば、「新島裏は教育者である」という日本での常識は、ボストンでは逆に非常識になりかねません。新島はミッション本部や日本の同僚宣教師たちが、「伝道一方」であることに不満を隠しておりません。ですが、新島の不平にも多少の無理があります。そもそも彼ら宣教師には、教育は「邪道」とまでは言いませんが、伝道サイドから見れば「脇道」みたいなもの、と考えられていたとしても不思議ではありません。

新島の非常識

私たち同志社教会の会員には、「新島牧師」というのは極めて当たり前です。見慣れた、身近な存在です。しかし、一歩、教会の外に出ると、同志社学内でも「新島牧師って誰や」の世界です。「新島牧師」という肩書きは、学内でも非常識と思われかねません。「新島校長」（だけ）が、大手を振ってひとり歩きしているからです。彼がもっている、牧師にして校長という二面性（・・・）をきちんと押さえること、つまり新島の「ウラ・オモテ」を正確に把握しないと、研究上も、教育上も困った問題が起きかねません。たとえば、最悪の場合、教育主体の学園にとって、伝道団体の同志社教会なんて「邪道」だ、という時代が来ないとも限りません。
要するに、新島は教育と宗教というふたつの領域で、「二足のわらじ」を履きました。私たちは、彼の「二股人生」を見逃してはいけません。

ウソ付き銅像

さて、結論です。ハーバードの非常識から話を起こしました。実は、わが同志社だって、大同小異なのです。だから、同志社や新島に関して、世間で通用している常識、それらを一度、もしかして非常識ではないか、と疑ったり、勘ぐったりしてみることも大事です。
その点、ハーバードなどは、最初から非常識を前面に出して、見る人に逆に常識を探究させる刺激やら、そのきっかけを与えることに成功している、と見ることでさえます。常識を問い直す、あるいは見直す、という非常識な行為が、案外大事なのです。常識から非常識へ、そして非常識から常識へです。物を見る目を鍛えれば、流動的な把握が可能です。そこから、検証や発見、さらには新しい常識が生まれてきます。